

「秦氏三兄弟」と「茶館」

平松圭子

一

「秦氏三兄弟——『茶館』前本」（全四幕）は雑誌『十月』（一九八六・六期に）登載された老舎の未発表戯曲である。副題に示されているようにこの戯曲の第一章第二場は現行の老舎の戯曲「茶館」の第一幕前半部分と構成、登場人物、時代いずれも重なっており、「茶館」との関連が認められる。この戯曲の原稿発見のいきさつは同誌に老舎の子息舒乙氏の解説「由手稿看『茶館』劇本的創作」が同時登載されている。舒乙氏の言によると大略次の如くである。

北京人民芸術劇院は「茶館」香港公演に先立ち、四月一日から三日まで北京で「茶館」を上演した。観劇に集った長期滞在外国人の座談会に出席を要請され、準備のため手元に保管している遺稿を調べるうちに偶然見つけたのである。原稿は大きな茶封筒に入っていて、封筒の表には老舎自筆で「茶館」と記されていた。原稿の文字是老舎の学生時代からの友人でかつ個人的に秘書を務めていた南仁芷の筆跡であった。しかしなぜか第一幕第二場の部分は欠落し

「秦氏三兄弟」と「茶館」

ていた。遺稿の山をさらに調べていると第二場の部分も見つけることができた。

「秦氏三兄弟」の題名は『十月』登載に際してその内容から『十月』編集部によってつけられたそうである。これが「茶館」の前身であるか否かについては次の焦菊隱の言葉が参考になる。この原稿は完成後、北京人民芸術劇院に持ちこまれたらしく、当時同院で演出を担当していた焦菊隱が「茶館」についての座談会で次のように発言している。⁽¹⁾

（「茶館」の）第一幕はうまく書けており一気呵成に仕上がっているが、第三幕は少々問題が残る。私の知るところでは、老舎は書き改めるつもりのようなのだ。第一幕はもと、普通選挙に関連する戯曲の第一場であった。原来、三人兄弟について書かれたもので、一人は譚嗣同派、一人は保皇党、もう一人は実業救国を主張している。実業救国を主張するのが秦仲義である。この人物は後に民族資本家となり発展するが国民党時代に押しつぶされる（中略）。我々は読んでみた結果、茶館という一つの場に集中させて社会全体の移り変りを反映させることができると考えた。

「秦氏三兄弟」の内容は北京に代々暮している中産階級の人々——秦家の三兄弟の生きかたを通し、維新運動後五十年間の変動を描こうとした戯曲である。大略を紹介する。

第一幕第一场 一八九八年維新変法上諭直後。北京、秦家の書斎。秦家は祖父の代に呉服商として成功し、現在は読書人を出すほどに繁栄している。長男秦伯仁は維新変法に

共鳴し自ら参加しようとする知識青年。結婚し生れたばかりの子供がいる。次男秦仲義は家業の呉服商を継ぎ紡績工場の経営に野心を燃やしている若い老板。結婚し、秦家の財政管理はこの次男が實際上握っている。三男秦叔礼は甘やかされて育ったため、正業にも就かず、アヘンをたしなみ、京劇の票友。兄達の援助をあてにして生活している。

第二場 維新運動失敗直後。北京裕泰大茶館。現行「茶館」の第一幕前半部分、餓えた母娘にうどんを食べさせるところまでを想像すればよい。清末の疲弊した社会像を印象付ける意図がうかがえる。

第三場 前場と同時期。秦家の書斎、次男秦仲義は維新失敗が秦家に累を及ぼすのを恐れ、体よく兄を暫時家から放逐しようとはかり、小作農老田に兄夫婦を預ける。

第二幕 一九一二年春。中華民国成立後の秦家。長男は革命政府の参議員となり派遣されて妻と共に一時上京中。次男仲義は紡績工場が成功し、兄夫婦の歓迎の宴を準備する。三男叔礼は相変らずならず者風。後半には種々のタイプの友人政客らが招かれて登場し、知名人になった伯仁を政治的に利用しようとする者、職を得ようとする者が現れ、一見平和そうに見えるが、軍閥の兵乱を告げる砲声が袁世凱の陰謀を暗示するかに人々を驚かす。

第三幕 北伐の頃。北京、秦伯仁の家。三兄弟は各々分かれて家を構え、伯仁は度重なる挫折から革命運動に直接か

かわるよりも次の世代の教育に力を注ぐ。大学で教育職に就いている。息子と娘は漢口で運動に参加しており、息子が国民党官憲に捕えられ犠牲になった報らせが入る。仲義の工場は益々順調に発展した。だが労働運動の潮は彼の工場にも波及しつつあり、小作農老田の息子田鉄根は活動家であるため工場をくびになり地下運動の闘士に成長しつつある。

第四幕 一九四八年春。北京、秦伯仁の家。三男叔礼はアヘンに染り、ぶらぶらしているが、米軍のジープにひかれて死ぬ。しかし彼の家は棺の用意すら不可能な困窮状況にある。仲義の工場は国民党の高官が株主として割りこんで来て没収され、すべての財産を失ってしまう。伯仁は学生らと腐敗選挙に反対し民主的普通選挙制要求デモに参加。負傷にも屈せず、特務に追われる田鉄根を家にかくまい、追跡する特務と対立する緊迫した場面で終る。

これら三兄弟のほかに彼らの家族、親戚縁者、友人の政客、小作農親子、学生、特務、警官等五十名ほどの人物が登場する。

「秦氏三兄弟」第一幕第二場の茶館の場面と「茶館」第一幕の登場人物を比較すれば、相似点を理解できるであろう。

(秦氏)

(茶館)

北京裕泰大茶館

同上

松二爺

同

常四爺

同

馬五爺 ⁽²⁾	同
李三	同
二德子	同
劉麻子	同
康六	同
黃胖子	同
秦叔礼	なし
恩子	宋恩子
祥子	吳祥子
皮太監	龐太監
秦仲義	同
鄉婦	同
小妞	同
王掌柜	王利発
なし	唐鉄嘴
なし	康順子

これを、焦菊隱や北京人民芸術劇院のスタッフが読んだという「茶館」の初稿と見て、恐らくまちがいないであろう。

いっぽう老舎も現行の「茶館」発表以前に「人民代表」という戯曲を書きその中の一部分を「茶館」第一幕に用いたといひ、以前一度書いた経験があるため「茶館」を順調に完成することができた、「茶館」第一幕が特に好評を得ているのはそのせいであると述べている。⁽³⁾ 夫人胡絮青氏も近年同じようなことを書いて⁽⁴⁾いるが、それは勿論老舎のこうした言葉をふまえての

「秦氏三兄弟」と「茶館」

発言であろう。「人民代表」がどんな集合体、機関の人民代表であるのか（たとえば国か市か）現在には知る手がかりもないが、国や市の人民代表を選ぶという点から見れば「秦氏三兄弟」で主張する普通選挙と劇の要素が重なる可能性も生じる。

二

「秦氏三兄弟」と「茶館」とでは、茶館の場面と秦仲義の登場を除けば、形式、戯曲のしくみ、登場人物等大きな隔りがあり、「茶館」は風格の異なる別個のタイプの戯曲に改められた。しかしなお幾つかの類似点、共通点を見ることが出来る。

1、時代背景

維新変法前後、辛亥革命の頃、解放直前という中華人民共和国成立前五十年間の時代的節目を背景に採っている。いわゆる「過去」の時代にしほり、忍耐するうちに新しい事態の到来があることを暗示し、正面から新時代の到来を歌頌しない。執筆当時の政治、社会体制を考える時、こうしたゆきかたは冒険に近い新しい試みではなかったか。⁽⁵⁾

2、戯曲を展開させる中心的要素の問題

両作品とも一本化された核心となるべき、戯曲の進展を支える要素が稀薄である。一人の主人公の運命がその戯曲の形成を支配する要素となり、他はそれに従属するというタイプの作品ではない。「秦氏三兄弟」では複数の主人公の運命が並行して進み、彼らの妻や子、親戚、友人、学生らが次々と絡み、複数のタテの線をふくらませ劇的効果を盛りこみつつ、時には一本

に重なるかのように見せて、又離れてしまう。「茶館」では主人公の存在自体がもっと薄くなり、茶館に来る客の会話や、出入する官憲、兵士、学生の動きによって各人の生活の断片を表現し、それらの断片によって綴られる叙事的な戯曲になっている。

3、結末の処理方法

主要人物の死によって作品全体の結末を処理する。「秦氏三兄弟」では三男の轢死であり、「茶館」では老板王利発の縊死である。老舎は初期の長編小説においても「死」による結末処理法を用いている。彼にとって人の「死」は絶えず脳裏から離れ得ないものであった。それは恐らく、八ヶ国連合軍北京侵入占領の時戦傷死した父（老舎は一歳半で顔も記憶にない父）のことを母や姉たちから何度も聞かされたであろう。また老舎自身が赤ん坊時代連合軍兵士の乱暴から幸い命拾いした話を聞かされたにちがいない。そうした幼い頃の経験と身の上話などが彼に「死」に対する特殊な感情を抱かせるようになったと思われる。

「茶館」第一幕・第三幕の末尾は上演に際し、焦菊隠によって改められた。『老舎劇作選』（一九五九年版）の「茶館」第一幕末尾は、編者が焦菊隠の演出方法にそって改めたが、第三幕末尾については遂に改めようとせず『収獲』版のままである。小劉麻子が王利発の自殺を知らせる部分を削ろうとしなかったのは、老舎の死に対するある種の考えかた——転換をうながすものとして——を示そうとしたのではないだろうか。

4、小人物

主要な登場人物は決して英雄的な大人物ではない。「秦氏三兄弟」の秦伯仁は若くして革命に参加するが、再三の政治的挫折を経験し、中国の復興に必要なものは民主的普通選挙であると主張する一途な知識人であり、強い意志と行動力で大衆を引っばってゆくようなタイプの人ではない。「茶館」には七十人余りの人物が登場し、五十数人が発話の機会を与えられるが、劇の進展を支えてゆくような大人物は登場して来ない。平凡な当りまえのように思われる人々によって戯曲が支えられている。

5、チェーホフ、ゴーリキーの戯曲との関連性

「秦氏三兄弟」という題名は『十月』編集部によってつけられたものであるが、ごく自然にチェーホフの戯曲「三人姉妹」を想像するであろう。事実「秦氏三兄弟」の構成、技法はチェーホフの「静劇」といわれる技法に相似している。観客の見えない所、即ち舞台の外で主人公らの運命を左右するような事件が起り、登場する人物ははっきりした思想とか筋書きによって行動し、劇がピラミッド型に進展するのではない。「三人姉妹」においても三人の主人公が設定され三人のドラマが各々進行し、中心となるストーリーはない。「三人姉妹」は四人のインテリ女性の話に四つのドラマをからませた戯曲であるといわれる。オーリガ、マーシャ、イリーナの三姉妹と三姉妹の中の一人の兄弟であるアンドレイのいいなすけナターシャの四女性に、イリーナの恋、マーシャの三角関係、ナターシャの三角関

係と未婚時代から主婦への変貌を描いたといわれている⁽⁸⁾。

ナターシャはいかなる時代のおずおずした臆病な性格が、結婚し子供が生まれるに従ってしっかり者の主婦に変貌し、夫アンドレイは学者（大学教授）を目指す失敗して市会議員となり、彼女は市会議長と密通する。「秦氏三兄弟」に恋愛、密通事件は現れないが、女性の変貌という点からいえば、秦伯仁の妻、顧師孟の変りかたはたくましい。第一幕で夫が政治運動をしているのではないかと疑いはらはする若妻から、夫に随って放浪するうちに堅実な革命家に変化している⁽⁹⁾。

「秦氏三兄弟」から「茶館」への改作の過程に焦菊隠ら北京人民芸術劇院スタッフの助言があったことは先に触れた。焦菊隠はスタニスラフスキーの演出方法に傾倒していたしチェーホフ、ゴーリキーの戯曲小説を紹介し、チェーホフとスタニスラフスキー、モスクワ芸術劇場についても知識を有している⁽¹⁰⁾。彼が「秦氏三兄弟」を一読し、舞台を茶館にしぼるように提言したのは、あるいはゴーリキーの「どん底」の舞台、安宿を意識しての上ではないだろうか。

老舎も「秦氏三兄弟」茶館場面を書く時、すでに「どん底」の大部分をとりいれている。それは劉麻子が英国製時計を旗人松二爺に見せ買わせようするところで、「どん底」第一幕ペーベルがコストウイリョフに売りつけた時計の残金を請求する場面に似ている。この劉麻子と松二爺の場面は「茶館」第一幕にそのまま移行して用いられた。「茶館」第三幕最終場面、王利発、秦仲義、常四爺三老人が紙銭をすぎ自分らの葬式を演じ退

「秦氏三兄弟」と「茶館」

場後、国民党高官が茶館を接収しに登場し、小劉麻子によって王利発の首吊り自殺が報じられる。「どん底」でもアル中の元役者の首吊りを告げる声で全劇の幕が終る⁽¹¹⁾。

チェーホフの戯曲、とりわけ「桜の園」「三人姉妹」は過去との訣別と未来への出発という二つのテーマが仕込まれており、悲劇的基調を喜劇的色彩が交錯しているといわれている。同様のことは「どん底」についてもいえるし、このような傾向は老舎のこの両作品にも共通するといえよう⁽¹²⁾。老舎の場合は風刺がさらに加わる。

三

一九五六年老舎は風刺劇「西望長安」を『人民文学』（一月号）に発表し話題を呼んだ。『劇本』編集部は早速老舎を招き創作談を聞いている⁽¹³⁾。「西望長安」は李万銘という人物が履歴を捏造し英雄として扱われ、地方官庁で厚遇を得ていた実話を戯曲化したものである。老舎は李万銘事件と、ゴーリ「検察官」との類似点——官僚の腐敗——に注目したが、現在の中国と当時のロシアの社会情況、体制の違いを指摘し、「検察官」風の風刺ではいけないと記者に語ったという。この発言は老舎がロシアの近代戯曲を読んでいたことを示している。

この風刺劇を創作するに当り、同年彼が翻訳したバーナード・ショーの政治劇「アップル・カート」に大きな啓発を得たと、ショーの資本主義民主制度、選挙制度に対する風刺を評価したことも記者は紹介している。そうして老舎は大胆に新しい

風刺劇を作り出すべきだと語ったという。「秦氏三兄弟」の創作と、「茶館」への改作に外国——ロシアの諸作品からの刺激がはたらいたことは十分に推察し得るであろう。

注

(1) 「座談老舍的『茶館』」(『老舍的話劇芸術』一九八二年 文化芸術出版社 三九三頁)

この座談会は一九五七年一月一九日『文芸報』編集部によって開かれたもの。出席者は焦菊隱、趙少侯、陳白塵、夏淳、林默涵、王瑤、張恨水、李健吾、張光年。

「茶館」は一九五七年七月『收穫』創刊号に連載され、この座談会の時には北京人民芸術院では上演準備にすでに入っている。

(2) 「秦氏三兄弟」の馬五爺は保鏢をしていたことのある秀れた武術者。二徳子はかつての弟子、善撲營の用人棒の身分で登場するのは「茶館」と同じである。「茶館」の馬五爺は吃洋教の有力者に改められている。かつて保鏢の武術者といえば「断魂槍」の沙子竜を想起するが、老舍は以前小説に書いた人物、事件を「茶館」においても用いる例は珍しくない。

(3) 我写過一个戲叫「人民代表」、化了許多勞動、後來扔掉了、我沒感到可惜。廢品并不是完全没有用的、勞動不会完全白費。後來我写的「茶館」中的第一幕、就是用了「人民代表」中的一場戲、雖然不完全一樣、但因為相似的場面写過一次了、所以再写就感到熟、有人說「茶館」第一幕戲

好、也許就是出過一次廢品的功勞。(注1書、二五二頁)

老舍は自分の作劇上の三つの欠点「生活不窮」「思想貧乏」「技巧不高」を並べてから、好ましいところもあるとして、演出家、俳優から脚本の改筆を求められれば、自分ではうまくできたと思う所も削り、舞台で必要と思われることを補うのにやぶさかでないと言っている。(『我的經驗』

『老舍論劇』一九八一年 中国戲劇出版社 二一九頁)

(4) 「關於老舍的『茶館』」(注1書、四〇八頁)

胡絮青氏はこの小文の中で次の主旨のことを述べている。

「茶館」の前に多幕劇「人民代表」を書き、北京人民芸術劇院に渡し上演するつもりであったが、「人民代表」は失敗し、上演されなかった。「茶館」創作の最初の意図は国家人民の最初の憲法とかかわりがあった。だから戯曲は歴史的に有名な康有為、梁啓超らの改良運動から書き始めたのである。書いている過程で次第に現在の形に変わってしまった。元来の形はほとんど失われてしまった。

胡絮青氏のいう「茶館」創作の最初の意図に「茶館」の前身「人民代表」を書こうとした意図まで含まれるのかどうか明白ではない。ただ「秦氏三兄弟」第一幕の時代背景が維新変法運動の頃である点から見ると「人民代表」と「秦氏三兄弟」は同一の劇稿ではないかと考えられる。

(5) 百花齊放、百家争鳴の方針が出されたのは一九五六年一月。その結果として反右派闘争一九五七年六月開始のはざまに「茶館」は執筆された。「茶館」の発表は一九五七

年七月『收穫』創刊号である。同年三月、老舎は「論悲劇」(『人民日報』一九五七、三、一八。『老舎論劇』七八頁)と題する小文を発表し、この中で遠慮勝ちに悲劇形式の戯曲への試みについて提言している。拙稿「老舎の『茶館』について」(放送大学研究年報、第3号、一九八五)を参照されたい。

(6) 老舎の初期の長編小説『老張の哲学』の李静の死は薄幸の少女の唯一の解決の道として死がほかされて描かれている。『趙子曰』は反政府の運動学生李景純の刑死により急速に結末に近づく。『駱駝祥子』の虎妞の死、あるいは小福子の死が祥子に与える打撃、祥子のおちぶれる最大のきっかけになる。彼が「死」をストーリー転換の重要なポイントに用いた例は多い。

八ヶ国連合軍が北京に侵入し、胡同の奥までやって来て家々を蹂躪、略奪を行った。ベッドに寝ていた赤ん坊の老舎は衣裳の空箱がかぶさって殺されずにすんだという。

(7) 第一幕末尾。

○『收穫』版。一九五八年版単行本(中国戲劇出版社)。

康順子 我……(要暈倒)

康六 (扶住女兒) 順子! 順子!

劉麻子 怎么啦?

康六 又餓又氣、昏過去了! 順子! 順子!

龐太監 我要活的、可不要死的!(怪笑) 哈哈……!!

○『老舎劇作選』(一九五九年九月、人民文学出版社)。一九

「秦氏三兄弟」と「茶館」

八〇年単行本(中国戲劇出版社)。

龐太監 我要活的、可不要死的!

静場。

茶客甲 (正与乙下象棋) 将! 你完啦!

現在この形が通行している。

第三幕末尾。

○『收穫』版、『老舎劇作選』(一九五九年版)その他の単行

本共に、

王利発 再見!

丁宝与小心眼兒進來。

小心眼兒 老大爺、干嗎撒紙錢呢?

王利発 誰知道!(下)

次に小劉麻子 沈処長らが登場、小劉麻子が茶館を喫茶兼ダンスホールに改め、出入りする人物を監視する案を提出する。それに対し沈処長が「好」を第四声で連発する。最後に、

小劉麻子 是!(往后跑) 王掌柜! 老掌柜! 我爸爸的老

朋友、老大爺!(入。過一会兒又跑回来) 報告

処長、他也不是怎么上了吊、吊死啦!

沈処長 好(蒿)! 好(蒿)!

○演出本(『茶館』的舞台芸術)一九八〇年 中国戲劇出版社 所収)。

王利発 再見!(互相鞠躬)

王利発は散らかった紙錢を拾い、腰帶をとると、拾った紙錢

をもう一度まいて奥へ入ってゆく。学生らのデモの歌声「団結就是力量」が高まって聞えてくる。

沈処長の一連の場面はカットされた。

「茶館」各幕末尾については次の論文がある。

「談『茶館』三幕戲三个結尾的处理」史承鈞。『戲劇芸術』一九八四、二期)

(8) 『桜の園・三人姉妹』(新潮文庫) 池田健太郎解説を参照。

(9) たとえば夫の行動、表情に不審な所を見つけて「你要是不謹慎、鬧出点禍来、我可怎么办呢」(一幕) といった女性が、「走南闖北的、総算是開了眼、有錢呢就花、没钱呢就忍着、凡事不往心里去」(二幕) とたくましさを増してゆく。

(10) 焦菊隱は一九四四年本格的にチェーホフ、ゴーリキーらの作品を翻訳している。

一九四七年北京でゴーリキー「どん底」を演出。

一九五一年「かもめ」「桜の園」「イワーノフ」「ワーニャ伯父さん」「三人姉妹」を訳し『契訶夫戯曲集』として出版された。『焦菊隱戲劇論文集』一九七九年 上海文芸出版社 四三七頁、四四八頁)

「向斯坦尼斯拉夫斯基學習」(一九五三)「契訶夫和莫斯科芸術劇院与斯坦尼斯拉夫斯基」(一九五四) いずれも『焦菊隱戲劇論文集』所収。

(11) 「どん底」の登場人物は安宿の主人夫婦、泊り客の泥

棒、鍵職人、売春婦、まんじゅう売り女、落ちぶれた男爵、アル中の元役者等下層市民。「茶館」の多くの人物に共通する。劇中に語られる事は彼らの人生観、生活哲学である所も共通性が濃い。

(12) チェーホフ劇と「茶館」との関連については

『老舍劇作研究』冉憶橋、李振潼共著(華東師範大学、一九八八)

「論中国話劇芸術対契訶夫的選択」朱棟霖『戲劇芸術』一九八八、一期) がある。

(13) 「老舍先生談諷刺劇『西望長安』的創作」(『老舍的話劇芸術』一四七頁)

補注 「秦氏三兄弟」は『老舍文集』一二卷(一九八七年、人民文学出版社)に収められ刊行されている。